

クレペリン検査における新PF値の妥当性に関する研究 (1)¹⁾

—精神健康度の変化との関連で—

野 田 勝 子²⁾

【問題と目的】

クレペリン精神作業検査は、Kraepelin, E. (1902)の連続加算法の実験にヒントを得て、内田勇三郎(1922)が開発した、我が国独自の作業検査である。内田は、作業曲線の見方として、第一系列と第二系列の2つのタイプを考えていた(外岡, 1973)。第一系列の見方は、性格特徴(分裂病者の曲線と分裂性性格者の曲線が同じ特徴を示す)を判定するもので、小林(1970)が、「人から10類型」として発展させ、さらに、麓(1960b)が、「精神特質性16類型」として独自に発展させた。第二系列の見方は、「定型」からのずれの程度(「定型」とさまざまな「異常型」を両極とする)を判定するもので、内田から外岡(1975)へ受け継がれ、現在は、日本・精神技術研究所において、「曲線類型判定」として判定されている。麓(1960a)は、これを「精神健康性24類型」として独自に発展させた。

これらの見方は、いずれも直観法によるため、判定には熟練を要する。しかしながら、後者については、相馬(1949)をはじめとして、数量化による判定の客観化が行われてきている(横田, 1958, 柏木, 1985)。また、コンピューターを用いた客観的判定も考案された(辻岡, 1974, 中塚, 1991)。

横田(1958)は、判定基準を明確にするために、直観的判定の指標を数量化して表現した判定基準を作成した。これを利用すれば、初心者にも判定が可能となるが、現在は絶版になっており、入手不可能である。

柏木(1985)は、相馬(1949)の「数量的取扱い」を発展させて、期待曲線からのずれを数量的に評価するPF式評価法(Profile Fluctuationの略)を考案した。Pfi値は、受検者の30行の平均作業量から回帰予測される各行の期待作業量と各行の実際の作業量との差の2乗

を期待作業量で標準化したものの総和である。PF式評価法の特徴として、柏木(1985)は、(1)標本の違いによって期待作業曲線に変化が現れること、さらに、(2)作業量水準の変化に伴い後期増加率にも変化が現れることを指摘している。

日本・精神技術研究所(1972)は、柏木(1985)によるPF式評価法を採用して、Model-1による数値的評価を行っている。Model-1は、外岡の収集した健常者の曲線のうち、臨床的にも精神的に健康であることを確かめられた「定型曲線」182例が基になって、期待作業量が算出される。したがって、Model-1によって求められたPF値は、直観的判定結果と対応すると考えられている(日本・精神技術研究所, 1972)。

このModel-1について、平均作業量から予測された期待作業量を結んだ期待曲線(作業量水準を10きざみにとった場合)を見ると、範囲率(前期と後期のそれぞれの最高点と最低点の差を各期の平均作業量で割ったもの)と、後期増加率(後期平均作業量を前期平均作業量で割ったもの)は、いずれも作業量水準が高くなると値が小さくなる(Figure 1, Figure 2)。すなわち、期待曲線は、作業量水準により、その形状や後期増加率が異なっている。そのため、これからのずれの程度を測るPF値は、受検者の示すプロフィールの形状が同じであっても、作業量水準が異なる場合は値が異なることになる。たとえば、前期も後期も一直線(後期増加率は0)の場合のPF値は、作業量水準が35以上の場合は作業量が多いほど大きいし、35以下の場合は逆になる(Figure 3)。

すなわち、曲線傾向は同じであるが作業量水準が異なる2つのプロフィールについて、「定型」からのずれの程度を測るときのModel-1の問題点として、以下の2点があげられる。

(1) 比較対象となる2つのプロフィールの期待曲線がそれぞれ異なるため、それからのずれの程度を示すPF値が異なる。

(2) PF値は作業量の差で計算するため、作業量の影響を受ける。

1) 本研究の一部は、日本心理学会第63回大会において発表された。

2) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)

クレペリン検査における新 PF 値の妥当性に関する研究 (1)

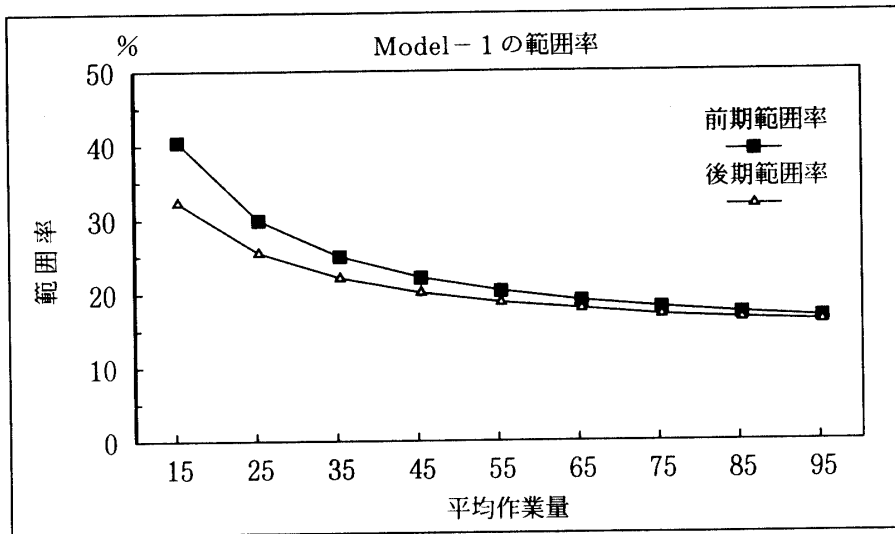


Figure 1 Model-1 の範囲率

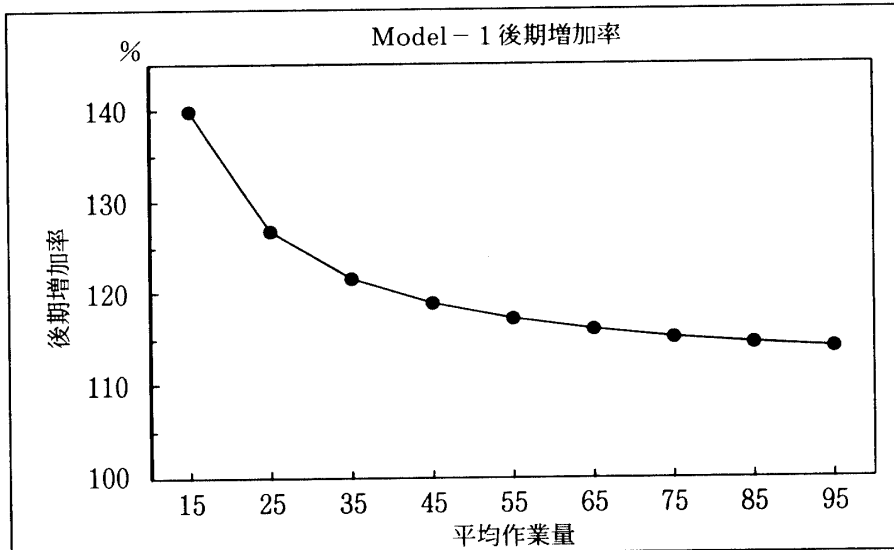


Figure 2 Model-1 の後期増加率

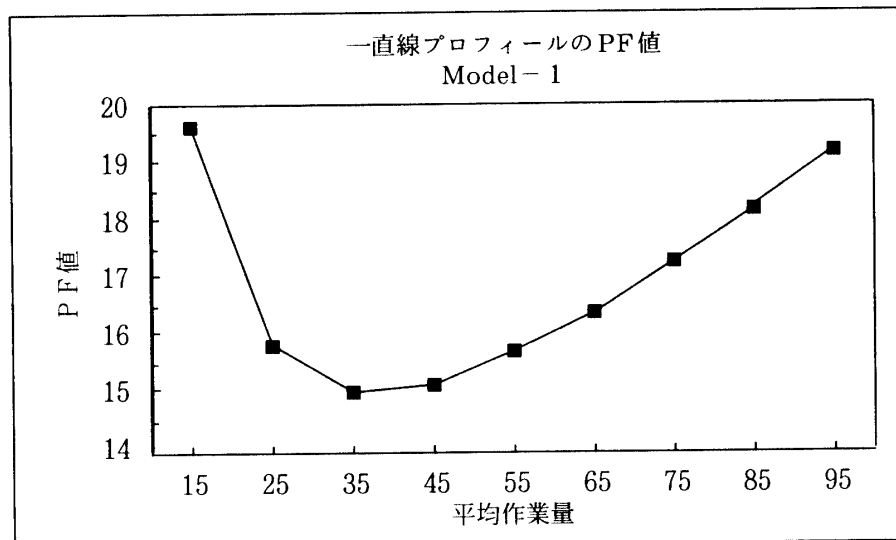


Figure 3 一直線プロフィールの PF 値

そこで、野田（1998）は、作業量水準に影響されることなく、理想型としての「定型傾向」からのずれを数量的に評価する新しい指標である「新PF値」を提案した（野田，1998）。この新PF値の特徴は以下になる。

(1)新PF値においては、作業量に影響されないように、各作業量を平均作業量で割って指数値に変換して、基準曲線からのずれを計算する。

(2)新PF値においては、理想型、すなわち、「一般正常人としての成熟に従って到達すべき“在るべき在りよう”」（外岡，1978）としての「定型傾向」からのずれの程度を測ることが目的であり、形状も後期増加率も、すべての作業量水準において一定であると考えられる。

Table 1 最標準定型

行	指数値
1	108.9
2	98.5
3	93.8
4	92.5
5	89.2
6	88.8
7	87.5
8	87.8
9	88.5
10	89.0
11	90.4
12	90.2
13	93.0
14	94.9
15	95.3
16	124.0
17	112.9
18	113.5
19	112.9
20	110.7
21	107.8
22	106.4
23	105.2
24	103.6
25	102.7
26	102.2
27	102.5
28	101.3
29	102.2
30	103.9
後期増加率	116%

PF値の基準曲線として、外岡（1978）による「最標準定型」の指数値（Table1）を採用した。

この「最標準定型」は、30行の平均作業量を100としたときの定型曲線がとる経過を示すもので、後期増加率は116%で一定である。外岡（1973）によると、「定型の平均曲線」の指数値は、作業量が40以上と以下とでは値が異なる（作業量が40以下の場合、範囲も後期増加率も大きい）ため、作業量が40以上のもの（122例）から求められた。實際上、臨床的に確かめながら「定型経過」をとるプロフィールを低作業量から高作業量のものまで大量に収集することは非常に困難であることから、現時点では、この「最標準定型」が理想型に最も近いと考えられる。

具体的に新PF値を求めるには、全ての受検者のプロフィールを、「最標準定型」と比較するに当たって、作業量について調整する必要があるため、実際の作業量を平均作業量で割って100倍して、実際の作業量の指数値を求める。これによって、全ての受検者の作業量を、作業曲線の形状を保持したまま平均作業量が100となるように調整できる。各行について、実際の作業量の指数値と「最標準定型」の指数値の差を2乗したものを「最標準定型」の指数値で割って各行の値を求め、それを合計して、新PF値を求める。「最標準定型」の指数値で割るのは、実際の曲線の1秒当たりの加算速度がその作業量と正比例の関係にあるためである。

新PF値の計算式は、以下ようになる。

$$\text{新PF値} = \sum (Z_j - R_j)^2 / R_j \quad \dots(1)$$

ただし、 $Z_j = j$ 行目の作業量 / 30行の平均作業量 $\times 100$

$R_j = j$ 行目の最標準定型の指数値 (Table1)

$j = 1, 2, \dots, 30$

この新PF値について、精神健康度との関係を見るために、精神科学研究所方式（以下SKK式）（籠，1969a, 1969c）による判定結果と新PF値との相関比を求めると、大学生（82名）は $\eta = 0.75$ 、高校生（131名）は $\eta = 0.80$ であった（野田，1998）。SKK式判定は、例えば、A-5のように、作業量段階を示すアルファベットと、定型からのずれの程度を示す数字の2側面から符号がつけられる。この符号を、適応性の高い安定群から不適応な不安定群まで9つに分類したものと、新PF値との相関比を求めた。

しかしながら、精神健康度の変化との関連、すなわち、個々のプロフィールの作業量の増減や、後期増加率の増減、および形状の変化との関連において、新PF値がどのような変化を示すかが示されていない。例えば、前期も後期も一直線を示すプロフィールの場合、どの作業

クレペリン検査における新 PF 値の妥当性に関する研究 (1)

量水準においても、新 PF 値は同じ値をとることが示された (野田, 1998)。しかしながら、一人の受検者が 2 度検査を受けたとき、プロフィールの変化に伴い新 PF 値がどのような変化を示すかが示されていない。本研究の目的は、同一人の 2 枚のプロフィールについて、直観的判定による精神健康度の変化と新 PF 値が対応するかどうかを検討することである。

【方 法】

同一人に年 2 回クレペリン検査を実施し、日常観察と、本人へのクレペリン検査結果の口頭での伝達と、自由記述の感想および FFPQ の結果とを参照しながら、クレペリン検査結果の変化と新 PF 値の変化とを比較した。

[被検者] N 大学 1 年生 16 名 (男子 8 名, 女子 8 名)

[検査時期] 1998 年 6 月 4 日 と 11 月 26 日 の 2 回

- 検査は、授業時間内に、日本・精神技術研究所の用紙と検査テープを用いて、筆者が実施した。
- 6 月 4 日の検査終了後に、クレペリン検査についての感想を自由記述で書いてもらった。
- 11 月 26 日のクレペリン検査の後に、FFPQ を実施し、両検査についての感想、および本人自身が気づいている変化 (6 月からの) について自由記述で書いてもらった。

[精神健康度の判定] SKK 式 (麓, 1969a, 1969c) (直観法) に基づき筆者が行った。

- 精神健康度の形状を示す符号は、定型 (h+, h,

h-), 移行型 (m+, m, m-), 非定型 (1+, 1, 1-) の 9 群に分けた。実際は、1 群に属するものがないため、h 群から m- 群までの 5 群に分かれた。

- 検査を実施した後、筆者が個人別に面談し、判定結果を伝えた。

[新 PF 値の算出手順]

- (1) 30 行の平均作業量を求める。(小数第 2 位を四捨五入)

$$A_v = \sum L_j / 30 \quad \dots(2)$$

ただし、 $L_j = j$ 行目の作業量
 $j = 1, 2, 3, \dots, 30$

- (2) 各行の作業量を平均作業量 100 に変換する。(小数第 2 位を四捨五入)

$$Z_j = L_j / A_v \times 100 \quad \dots(3)$$

ただし、 $j = 1, 2, 3, \dots, 30$

- (3) 最標準定型の指数値 (Table 1) を利用して、以下の式で新 PF 値を求める。(小数第 2 位を四捨五入)

$$\text{新 PF 値} = \sum (Z_j - R_j)^2 / R_j \quad \dots(4)$$

ただし、 $R_j =$ 最標準定型の指数値 (Table 1)
 $j = 1, 2, 3, \dots, 30$

【結果と考察】

16 名についての約半年の間隔をおいて 2 回実施されたクレペリン検査の直観判定結果と新 PF 値は、Table 2 に示したとおりである。

Table 2 データの精神健康度符号と新 PF 値

	精神健康度		新 PF 値		健康度変化	新 PF 値差
	98/06/04	98/11/26	98/06/04	98/11/26		
Na. 9	m+	h	10.1	5.5	↑	-4.6
Na. 2	h-	h	8.1	5.1	↑	-3.0
Na. 4	m	m+	18.7	15.7	↑	-3.0
Na. 7	m	m+	23.6	11.6	↑	-12.0
Na. 6	h	h	6.1	5.9	→	-0.2
Na. 8	m+	m+	12.6	12.3	→	0.3
Na. 3	m+	m+	14.6	13.4	→	-1.2
Na.13	m	m	15.5	19.9	→	4.4
Na.11	h	h-	6.2	10.4	↓	4.2
Na.15	h	h-	8.0	11.3	↓	3.3
Na.14	m+	m	9.8	16.5	↓	6.7
Na. 5	m+	m	18.5	20.8	↓	2.3
Na.12	m	m-	18.4	28.9	↓	10.5
Na.16	h-	m+	8.5	10.5	↓	2.0
Na.10	h-	m	9.5	21.4	↓	11.9
Na. 1	h-	m	11.2	16.8	↓	5.6

平均作業量は、6月は64.9、11月は73.7であり、平均で113.6%の伸び率であった。後期増加率の平均は、6月は112.8%、11月は109.7%であり、平均で3.1%の減少であった。

新PF値の平均は、6月は12.5、11月は14.1であり、平均で1.6の増加であった。11月は6月より「定型」からのずれがわずかであるが大きくなり、精神健康度のわずかな低下が推測される。6月と11月の新PF値の相関係数は、 $r = 0.506$ であった (Figure 4)。

新PF値と平均作業量との相関係数を求めると、6月は $r = -0.593$ 、11月は $r = -0.615$ であった。作業量の多いものほど「定型」からのずれの小さいものが多い、この傾向は、6月よりも11月の方が強かった。

新PF値と精神健康度の判定符号との相関比は、6月は $\eta = 0.877$ 、11月は $\eta = 0.970$ であった (Figure 5, Figure 6)。野田 (1998) による結果 (大学生 ; $\eta = 0.75$ 、高校生 ; $\eta = 0.80$) よりも相関比が高かった。本研究の被検者の場合、作業量水準が高く、精神健康度が高いものが多い、飛び抜けて低いもの (非定型) がいない集団であったため、相関比も非常に高くなったと考えられる。

個々のプロフィールについて見ると、精神健康度が上がったものは、16名中4名 (例えば、Na 9) あり、それぞれの新PF値は小さくなり、最標準定型からのずれが小さくなった。精神健康度が下がったものは、8名 (例

えば、Na10) あり、それぞれの新PF値は大きくなり、最標準定型からのずれが大きくなった。精神健康度が同じものは、4名 (例えば、Na 6) であり、新PF値の差は最大で4.4、最小で0.2であった。

新PF値は、直観的判定結果の変化と対応した結果を示しており、16例という少数ではあるが、矛盾した結果は一例も示さなかった。

【事例の検討】

新PF値が、プロフィールの変化、すなわち、作業量の増減、後期増加率の増減、形状の変化と対応しているかどうかについて、精神健康度が上がったもの、下がったもの、変化のないものをそれぞれ1例ずつ取り上げて検討する。

精神健康度が上がったものは4名あり、それぞれの新PF値は小さくなり、最標準定型からのずれが小さくなったが、ここでは、Na 9を取り上げる。精神健康度が下がったものは8名あり、それぞれの新PF値は大きくなり、最標準定型からのずれが大きくなったが、ここではNa10を取り上げる。精神健康度に変化のないものは4名であり、新PF値の差は最大で4.4、最小で0.2であったが、ここではNa 6を取り上げる。

[事例1 : Na 9] 精神健康度 上昇 (m 群 ⇒ h 群) (Figure 7)

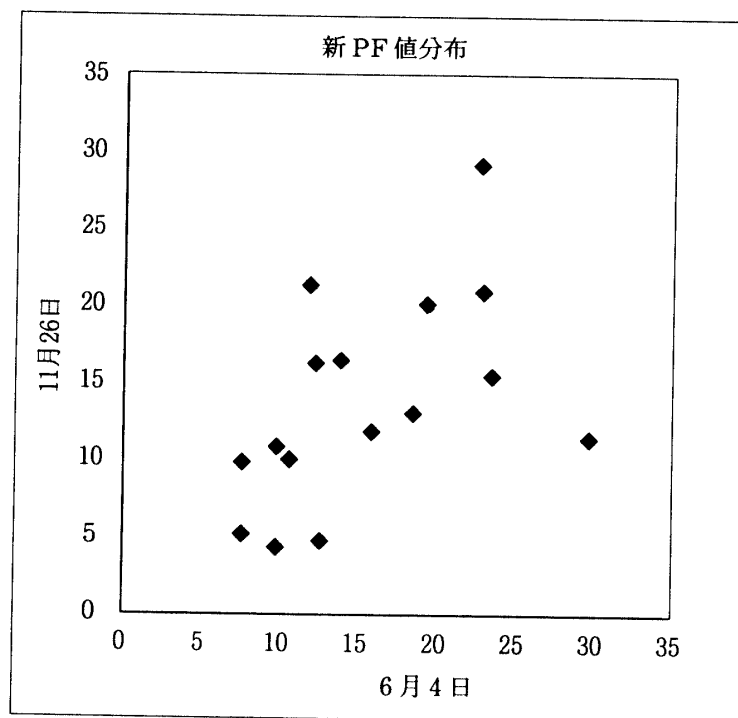


Figure 4 新PF値分布

クレベリン検査における新PF値の妥当性に関する研究(1)

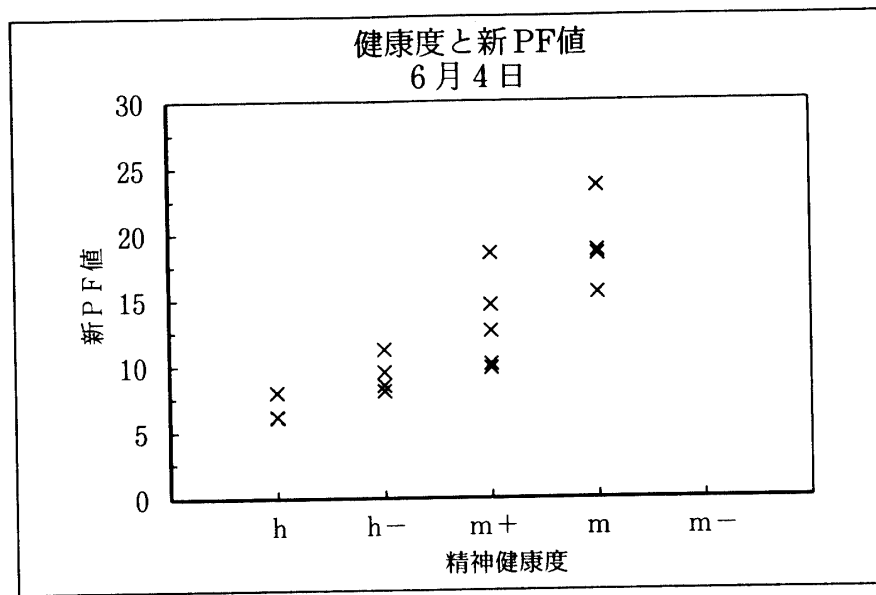


Figure 5 精神健康度と新PF値
6月4日

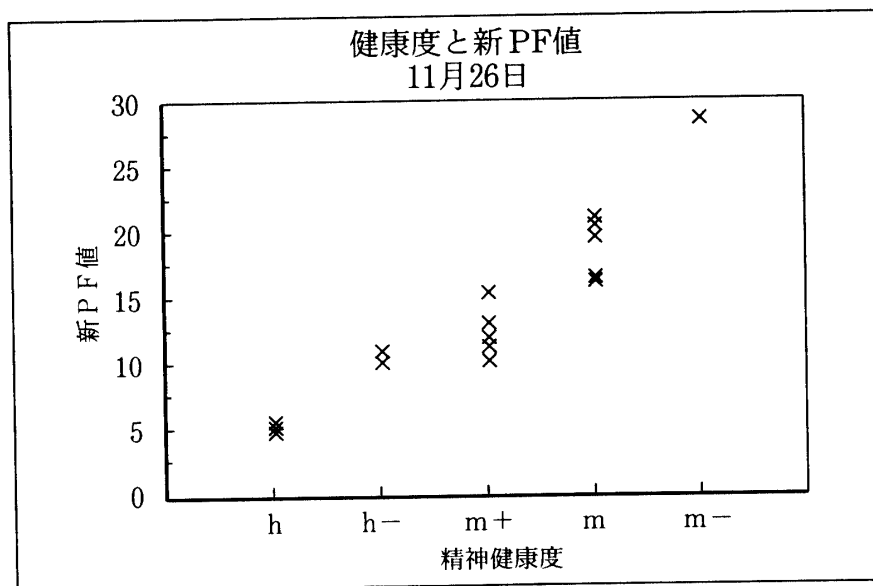


Figure 6 精神健康度と新PF値
11月26日

○ 6月4日 (新PF値=10.1)

判定; 移行型 (m+)。

初頭部が厚くて曲線範囲が長く、波動(小さなとび上がり)のある下がり傾向。

特性; 1-2型。

適応が早く、周囲と一体となって明るく行動するが、自分をアピールしたり、周囲に同調しやすい。

被検者の感想; 検査はしんどかった。

○ 11月26日 (新PF値=5.5)

判定; 定型 (h)。

波動はへこみ傾向。

特性; 3-2型。

テンポがゆっくりで温和であり、おっとりと周囲にとけ込んでいる。

被検者の感想; 少し、疲れがたまっている。

FFPQ: 高得点の因子; 非情動性。高得点項目(群居, 弛緩)。

群居を好み、活動水準が高く、情緒が安定。
 ストレスがあっても緊張しない。

*事例1は、作業量が、非常に多くなり (Av.68.3→Av.91.7), SKK 式作業量段階 (麓, 1969a) が1段階上 (B→A) になっている。後期増加率は115.8%から117.8%に増加している (一般には後期増加率は検査反復により減少する)。心的バランスも良くなっている (m+→h)。新PF値は、4.6小さくなっている (10.1→5.5)。精神特質性 (麓, 1969b) は、1-2型から3-2型へ変わり、心的エネルギーは少々弱くなり、流動的であったのが現状維持的になり、その分、気負って動くことがなくなり、落ち着いて周囲と一体となって動ける状態である。

この事例は、精神健康度の上昇が大きい例であり、作業量の上昇と後期増加率の増加と心的バランスの回復と

が伴っていて、新PF値が大きく減少して、定型からのずれが小さくなったことを示している。

[事例2: No.10] 精神健康度 下降 (h群⇒m群) (Figure 8)

○ 6月4日 (新PF値=9.5)

判定; 定型 (h-)

波動が鈍角で、初頭の出が小さい。

特性; 2-2型。

エネルギーがあり、じっくり頑張っている。

被検者の感想; 加算中何をやっているのかわからなくなる。

○ 11月26日 (新PF値=21.4)

判定; 移行型 (m)

波動が鋭角で大きく、終末部が下がり傾向。後期増加率が少ない。

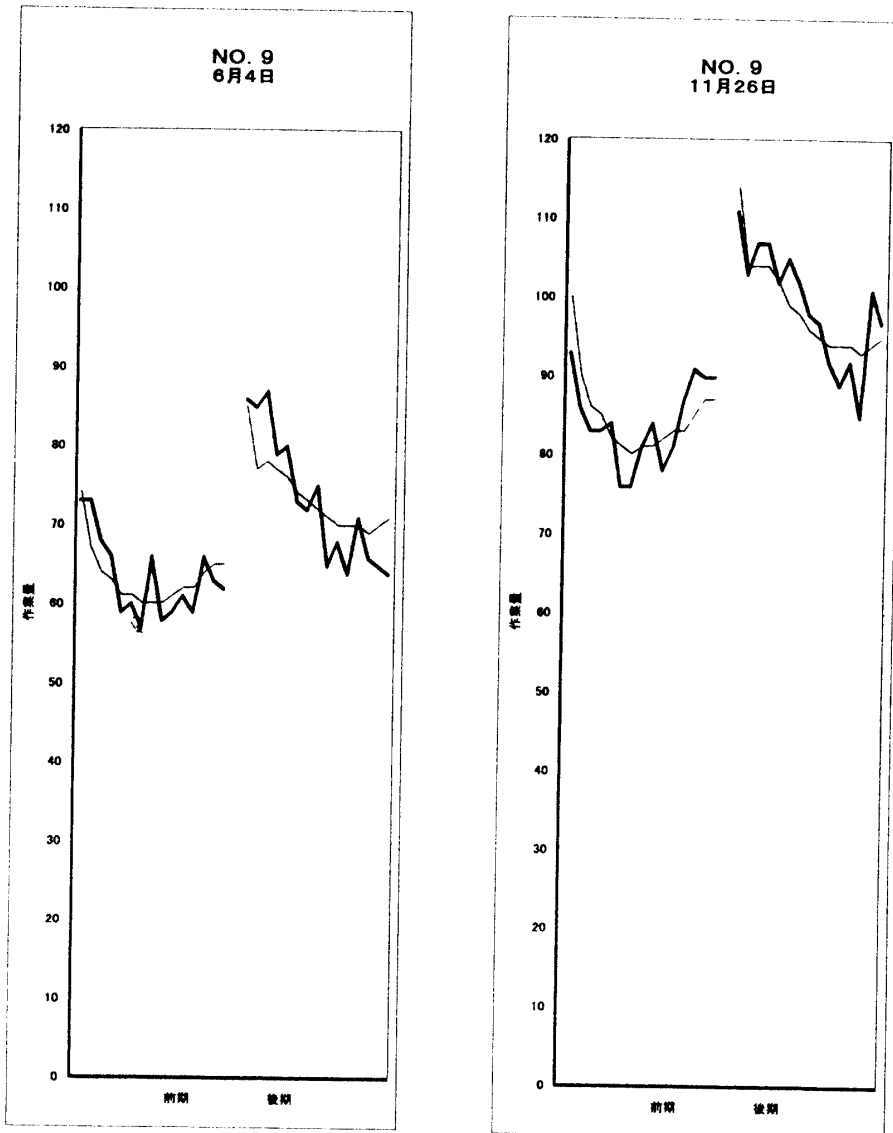


Figure 7 事例1 (No.9) のプロフィール

クレペリン検査における新 PF 値の妥当性に関する研究 (1)

特性；1-0型。

勝ち気で一途に頑張るが、要求水準が高く、気負って行動しがちである。思いと行動が一致しにくく、成果となりにくい。

被検者の感想；風邪をひいていて、疲れている。状況（アルバイトの）に慣れていなくて、失敗が多い。入試のころは、まじめで根性があった。あれは、仮の姿？

FFPQ：高得点の因子；分離性、自然性、遊戯性。高得点項目（冷淡、競争、警戒、大まか、無責任、衝動、無計画、保守、芸術への関心）。新奇なものへの好奇心旺盛で、情緒豊か。他者とはクールな接し方をし、競争を好み、警戒心が非常に強い。非統制的で、人為的な統制を好まない。

*事例2は、作業量の増加がほとんどない（Av.59.7→59.9）。後期増加率は、114.6%から108.6%に減少している。心的バランスは、悪くなっている（h→m）。新PF値は、11.9大きくなっている（9.5→21.4）。精神特質性は、2-2型から1-0型に変化し、エネルギーが弱くなり、信念的であったのが成果を求めるようになり、興奮気味で、背伸びしてがんばっている状態である。一生懸命になればなるほどミスがしやすい。面談時の本人の話では、アルバイト先で、次々仕事をこなさなければならず、よく失敗をするとのことであった。

この事例は、精神健康度の下降が大きい例であり、作業量が増加せず、後期増加率の減少と心的バランスのくずれが伴っていて、新PF値も大きく増加して、定型からのずれが大きくなったことを示している。

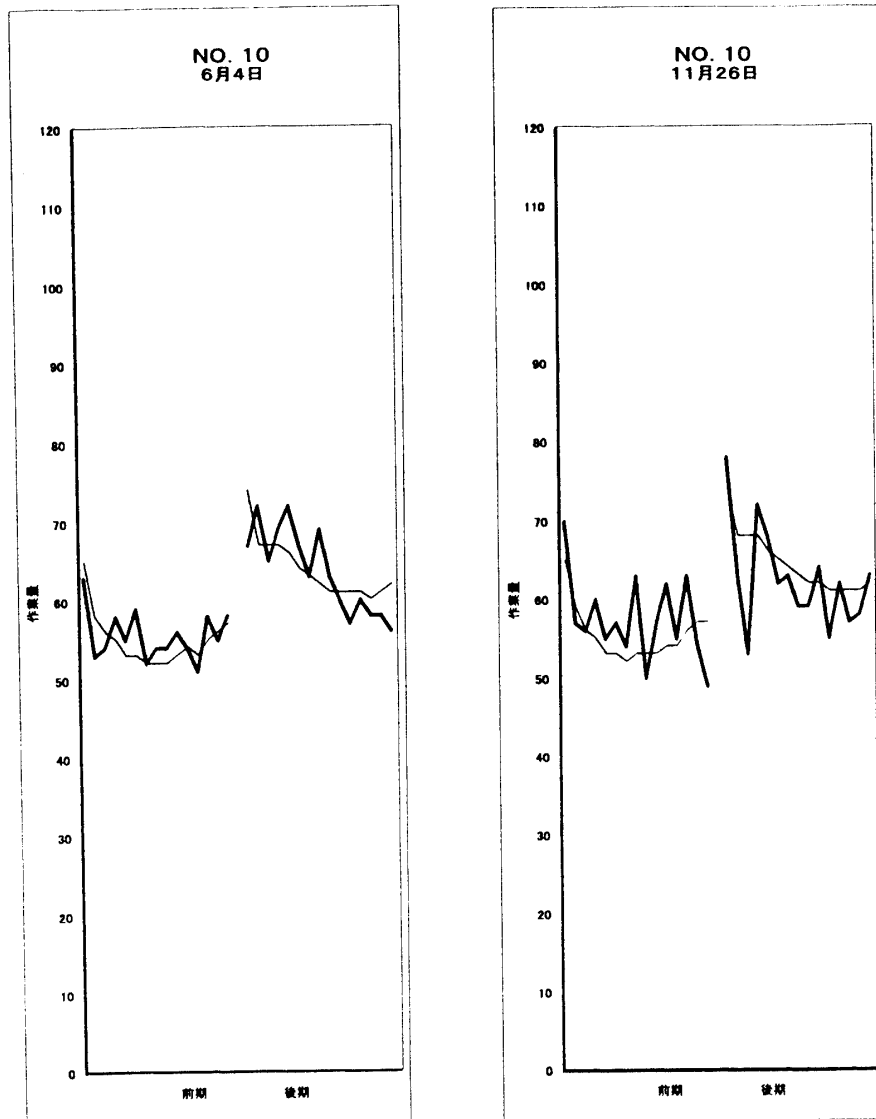


Figure 8 事例2 (No.10) のプロフィール

[事例3: No.6] 精神健康度 変化なし (h群⇒h群)
(Figure 9)

○ 6月4日 (新PF値=6.1)

判定; 定型 (h)。

波動が少なく丸い。へこみ傾向。定型傾向がしっかりある。

特性; 3-2型。

明るく温和で、落ち着いていて、無理なく順応している。

被検者の感想; 無記入。

○ 11月26日 (新PF値=5.9)

判定; 定型 (h)。

波動は細かく下がり傾向。エネルギーが弱い、定型傾向がしっかりある。

特性; 4-0型。

人当たりが柔らかく穏和で、細かく気配りをしながら、物堅くがんばっている。

被検者の感想; 5, 6月はまだ慣れていなく、友達があまりいなかった。今は、毎日自動車学校に行っているのととても疲れている。

FFPQ: 高得点の因子; 現実性。高得点項目 (活動, 群居, 計画, 芸術への無関心)。

群居を好み、活動水準が高く、目的をもって計画的に行動する。現実的で、芸術には無関心。

*事例3は、作業量が多くなり (Av.69.1→Av.80.7), 作業量段階が1段階上 (B→A) になっている。後期増加率は、121.1%から116.0%に減少している。心的バランスの変化はほとんどない (h→h)。新PF値も、ほ

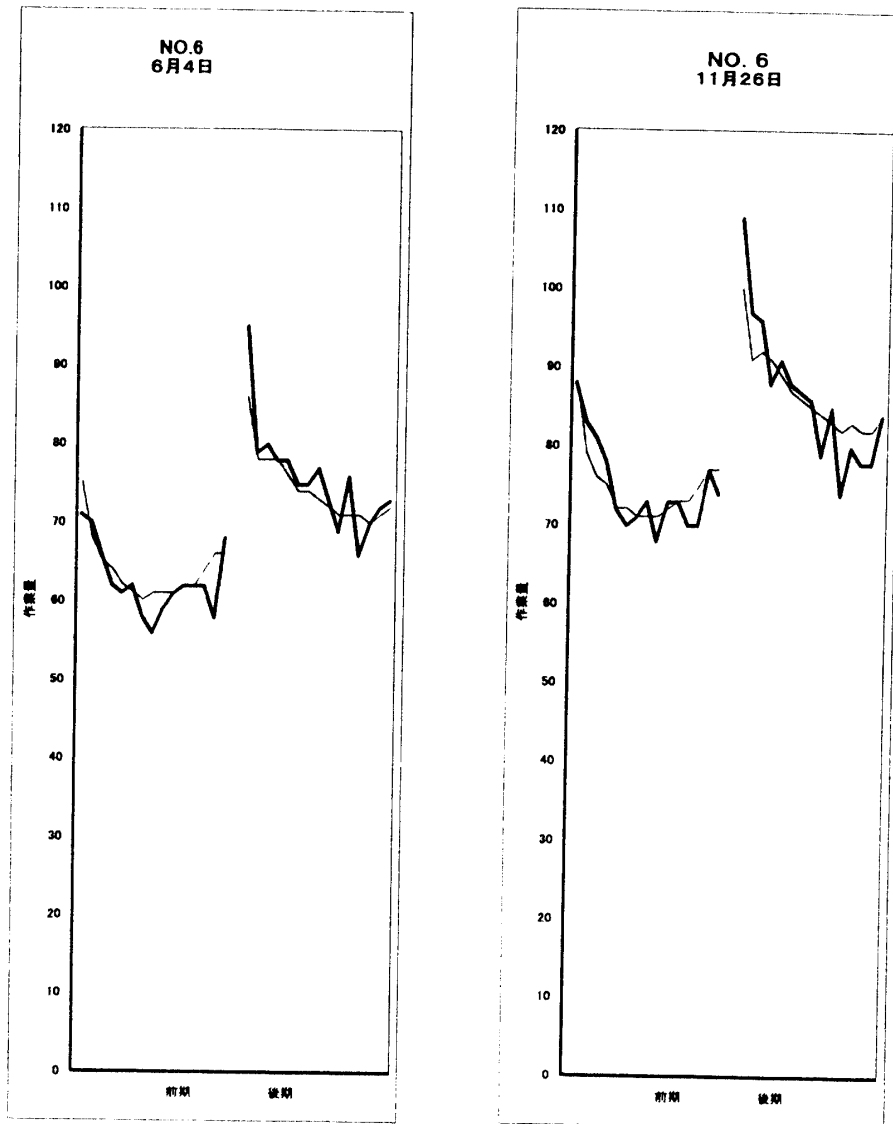


Figure 9 事例3 (No.6) のプロフィール

ぼ等しい (6.1→5.9)。精神特質性は、3-2 型から 4-0 型へ変わり、心的エネルギーがさらに弱くなって現実受容的から気遣いが多くなり、周囲へ細かい気配りをし、完璧を求めるようになっている。周囲と一体となって現実的に考えて行く方で、落ち着いて行動する。

この事例は、作業量が大きく上昇したが精神健康度の変化のほとんど見られない例であり、後期増加率は減っても高い率 (最標準定型の後期増加率と同じ値) を維持し、2 回とも「定型」経過を示し、心的バランスはほとんど変化がなく、新 PF 値もほとんど等しい値を示している。定型からのずれの程度が同じであることを示している。

しかしながら、この事例について、Model-1 による PF 値 (日本・精神技術研究所, 1972) を計算すると、6 月は 4.3, 11 月は 5.6 となり、PF 値が大きくなる (1.3)。すなわち、この事例の場合、作業量の増加が、PF 値に影響を与えたと考えられる。

【今後の課題】

今回は大学 1 年生のデータであり、作業量水準が非常に高いものが多かったので、今後は、被検者の人数を増やし、作業量水準の低いものを多く集めて、検討する必要がある。

直観的判定結果と対応する数量的評価法としての新 PF 値の今後の課題として、以下の点が考えられる。

(1) 新 PF 値は、「定型」に近いプロフィールについて、「定型」からのずれの程度を数量的に評価するのに有効であるが、「定型」からのずれが非常に大きいプロフィール (例えば、非定型) については、今後の検討が必要である。さらに、「定型」「移行型」「非定型」に対応する新 PF 値の基準値について検討する必要がある

(2) 新 PF 値は、曲線傾向からのずれを測るが、波動の程度 (外岡; 波動率, 横田; 動揺率) を考慮しないため、同じ曲線傾向を示しているも波動のほとんどないプロフィールの新 PF 値の方が、波動の大きいプロフィールの新 PF 値よりも小さくなる傾向がある。したがって、直観的判定において、程良い波動とされるプロフィールを測る評価法を別に考える必要がある。

(3) 新 PF 値で採用した「最標準定型」の形状と後期増加率について、新しいデータによって吟味する必要がある。すなわち、作業量水準との関係で、一定の形状であるのか、一定の後期増加率であるのか、それぞれについて検討する必要がある。

今後、新 PF 値と直観的判定結果との対応を検証することにより、クレペリン検査の臨床的有効性の検証にも役立つものと考えられる。

参考文献

- 麓 暢 1969a 解説シリーズ<4>改訂版 精神健康性 精神科学研究所
 麓 暢 1969b 解説シリーズ<5>改訂版 精神特質性 精神科学研究所
 麓 暢 1969c 精神検査法入門 精神健康度判定技術編 精神科学研究所
 柏木繁男 1985 内田クレペリンにおける解析的評価法 金子書房
 小林晃夫 1970 内田クレペリン精神検査法による人間理解 東京心理技術研究会
 中塚善次郎 1991 内田クレペリン検査の新評価法 風間書房
 日本・精神技術研究所編 1972 内田クレペリン精神検査の数量的評価法 日本・精神技術研究所
 野田勝子 1998 クレペリン精神作業検査の新しい客観的指標 新 PF 値の提案 日本心理学会第62会大会発表論文集 355.
 相馬紀公 1949 内田・クレペリン精神反応検査の数量的取扱い 日本・精神技術研究所
 外岡豊彦 1973 内田クレペリン精神作業検査の定型認識の変遷 精神作業検査要覧 実務教育出版
 外岡豊彦監修 日本・精神技術研究所編 1975 内田クレペリン精神検査・基礎テキスト増補改訂版 日本・精神技術研究所
 外岡豊彦 1978 内田クレペリン曲線詳解<論考編> 清水弘文堂
 辻平治郎編 1998 5 因子性格検査の理論と実際 北大路書房
 辻岡美延・東村高良 1974 内田クレペリン精神検査の因子分析的研究-判定の客観的総合記号と分析的診断原理の確率- 内田クレペリン検査50周年記念シンポジウム討論資料集 日本・精神技術研究所
 内田勇三郎 1951 内田クレペリン精神検査法手引き 第6改訂版 日本・精神技術研究所
 横田象一郎 1958 クレペリン精神作業検査解説 新訂増補 金子書房

(1999年9月16日 受稿)

ABSTRACT

Concurrent Validity of the New-PF Score with the Intuitive Rating of the Uchida-Kraepelin Psychodiagnostic Test (1)

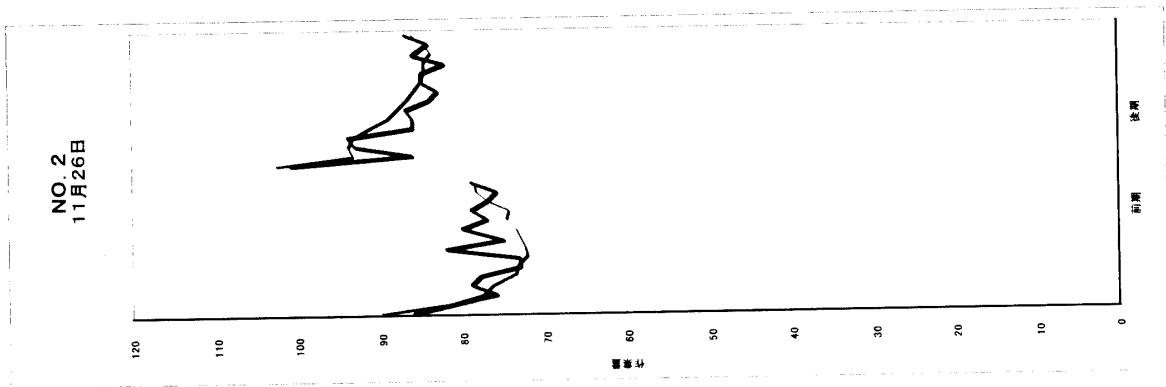
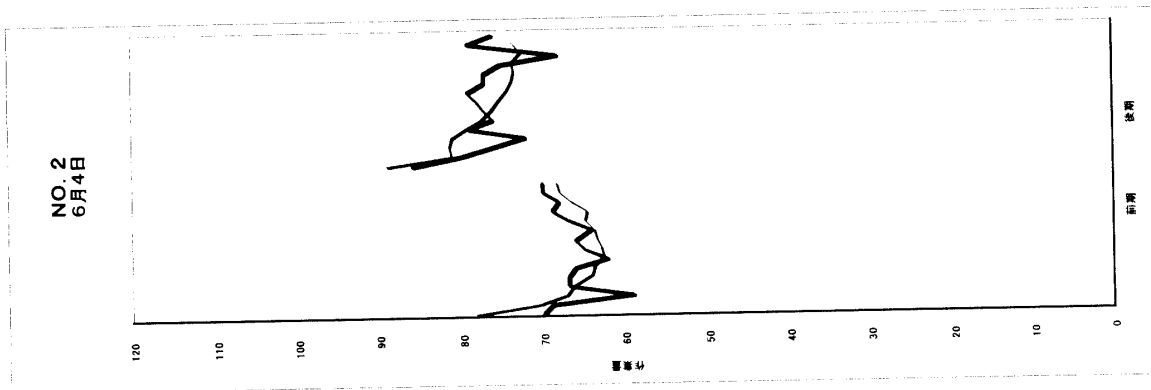
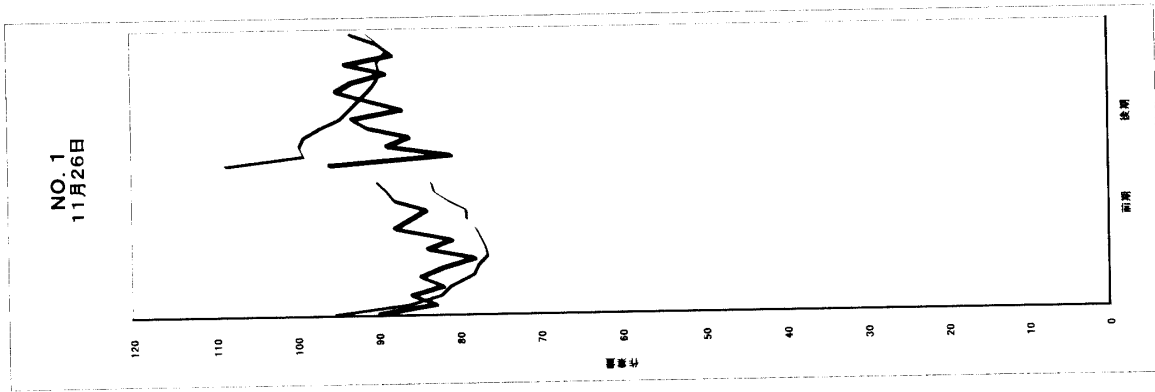
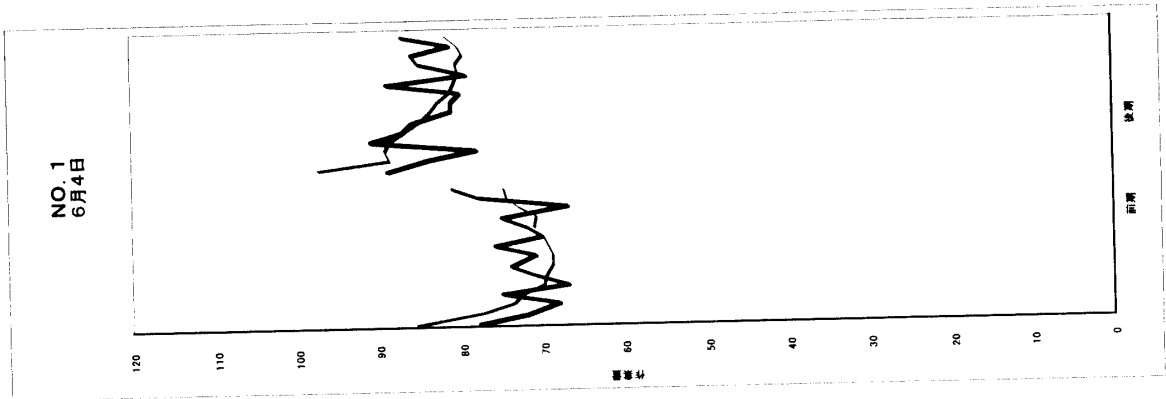
Katsuko NODA

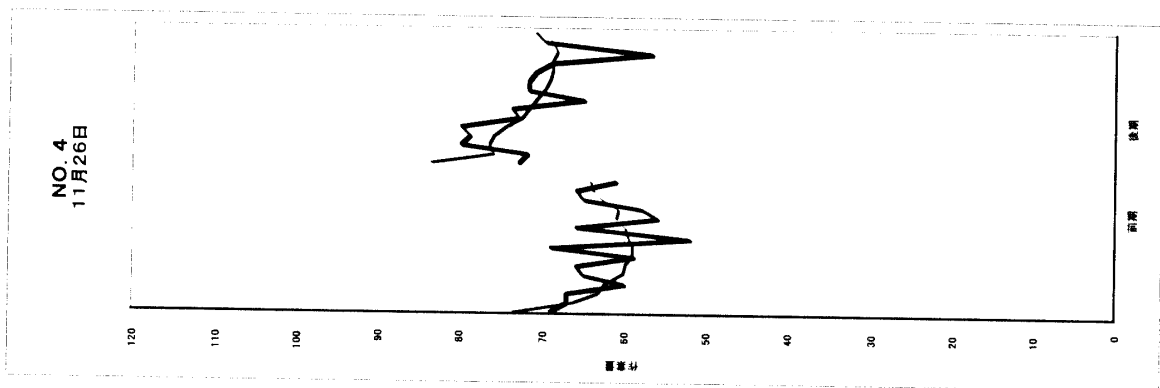
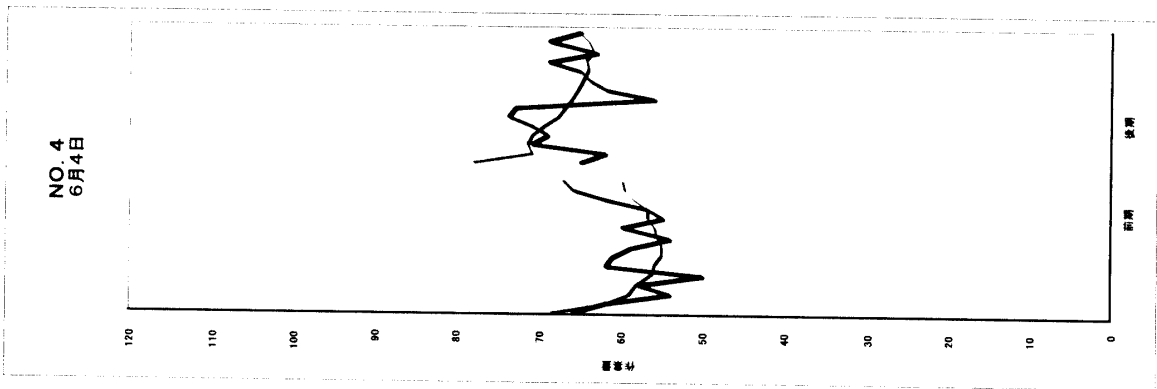
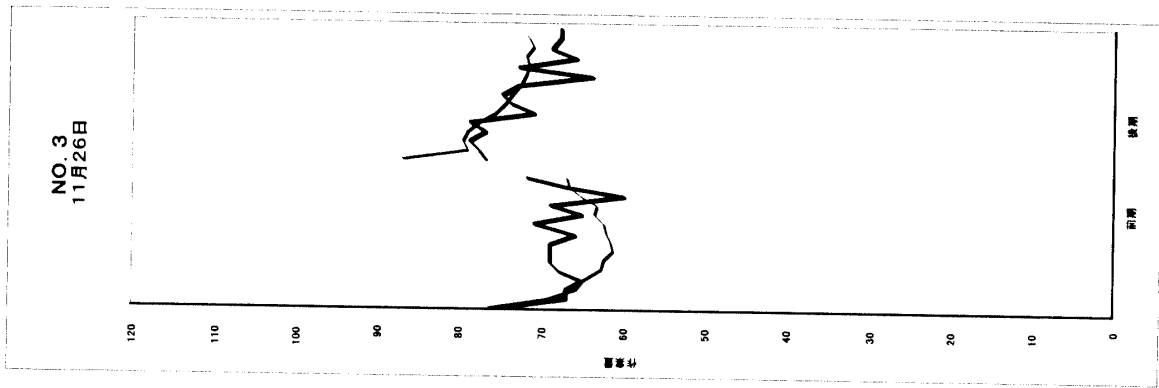
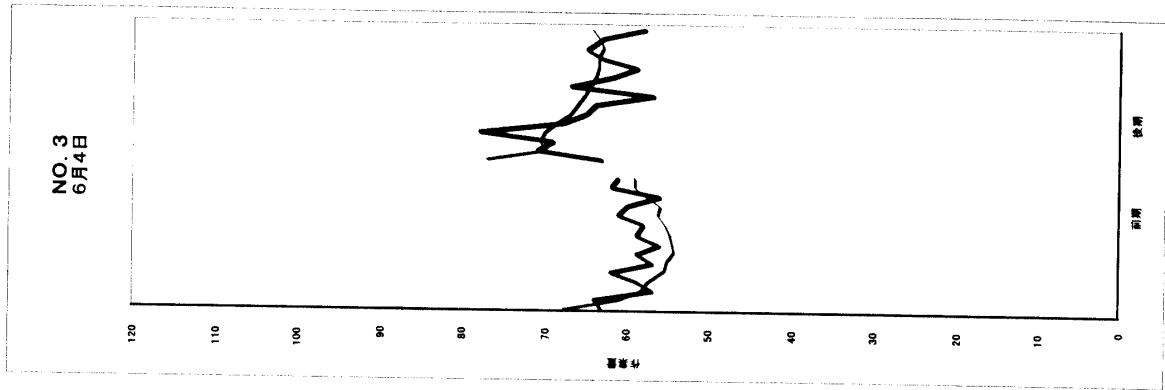
Concurrent validity was examined between the New-PF score, which evaluates objectively the degree of deviation from the "Typical Normal Curve" defined by Uchida, and Uchida's intuitive rating. To verify the change of the New-PF score in relation to the change of the intuitive rating, the Uchida-Kraepelin Test was administered to 16 university students twice at 6 months' interval. The results were as follows: 1)The second time's New-PF scores of the subjects whose second intuitive ratings were higher than the first ratings became lower than the first scores. 2)The second time's New-PF scores of the subjects whose second intuitive ratings were lower than the first ratings became higher than the first scores. 3)The second New-PF scores of the subjects whose ratings between two points in time were the same became approximately equal to the first New-PF scores. The results showed a relatively high degree of concurrent validity.

Key words; New-PF score, the intuitive rating, Uchida-Kraepelin Psychodiagnostic Test

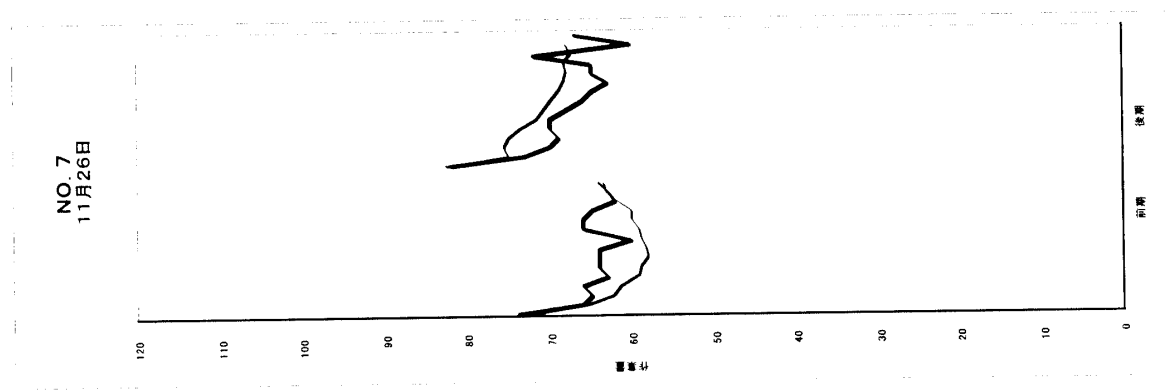
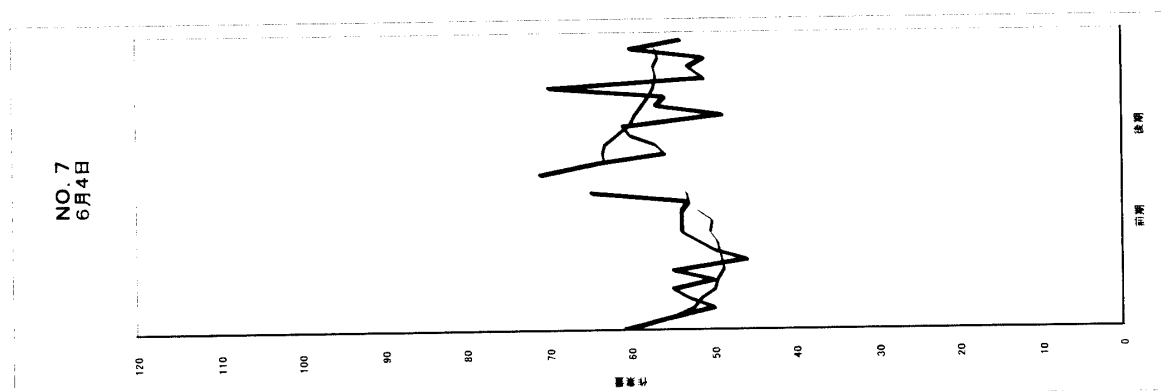
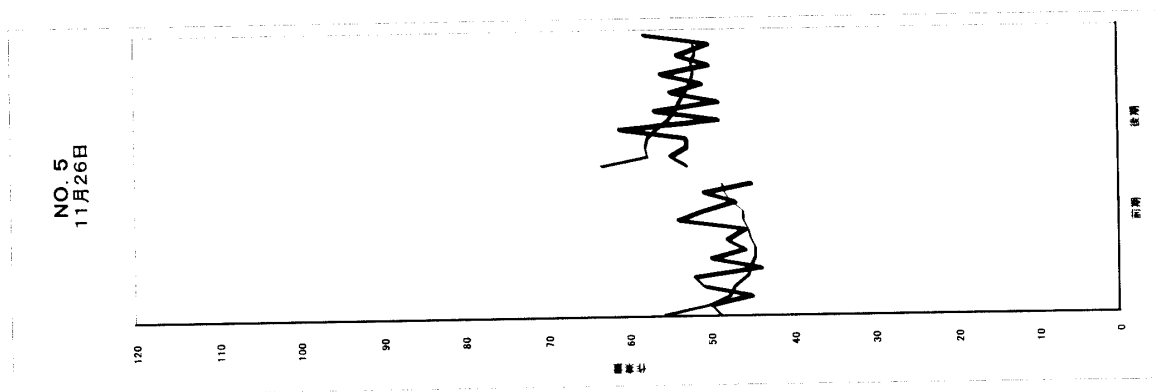
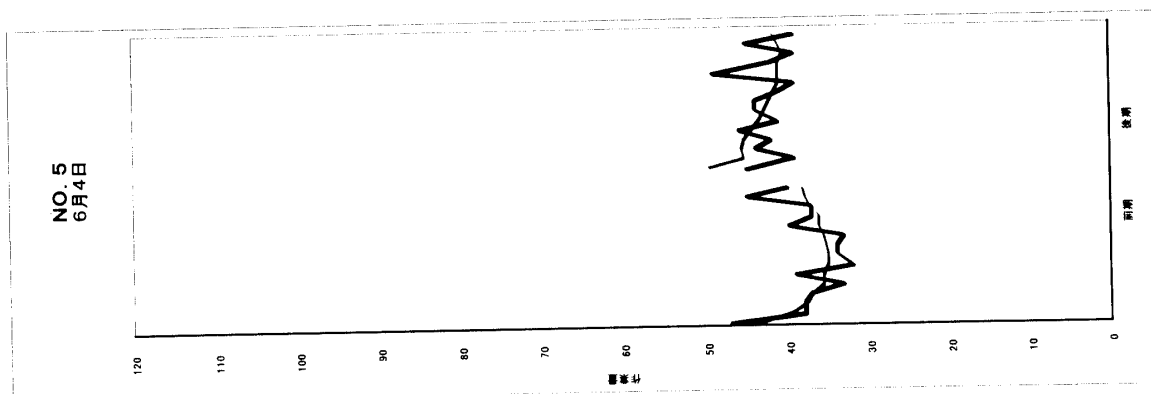
クレベリン検査における新PF値の妥当性に関する研究(1)

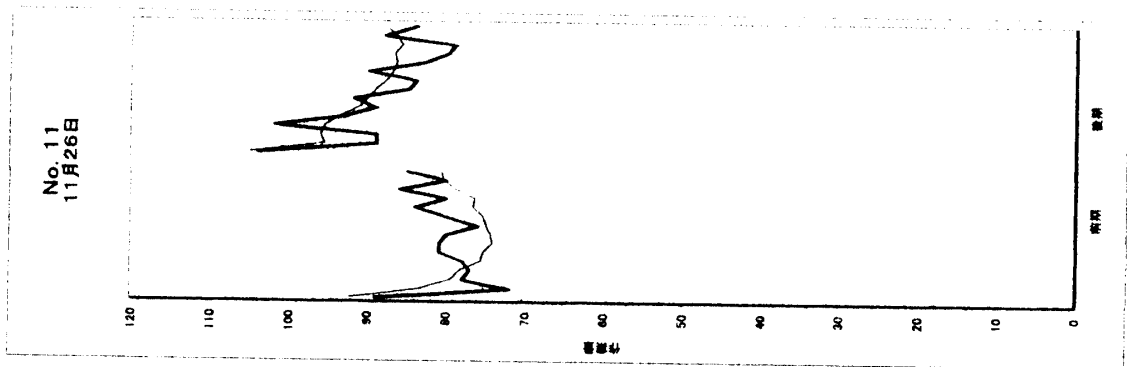
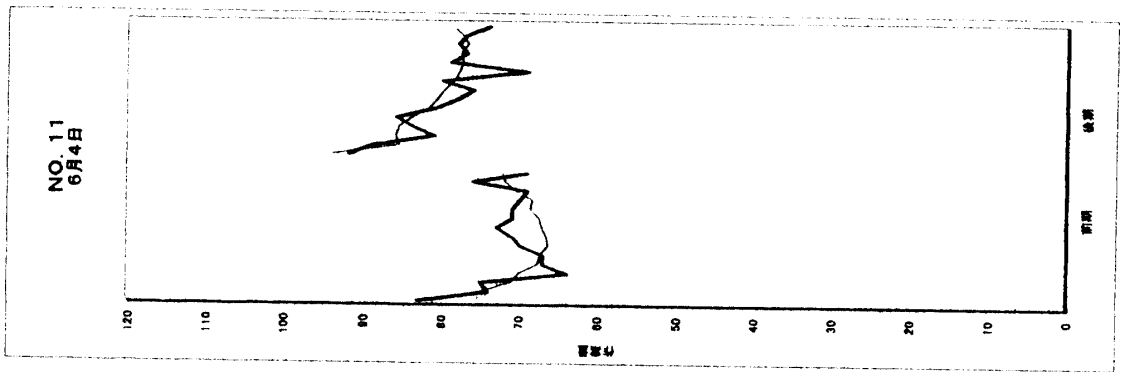
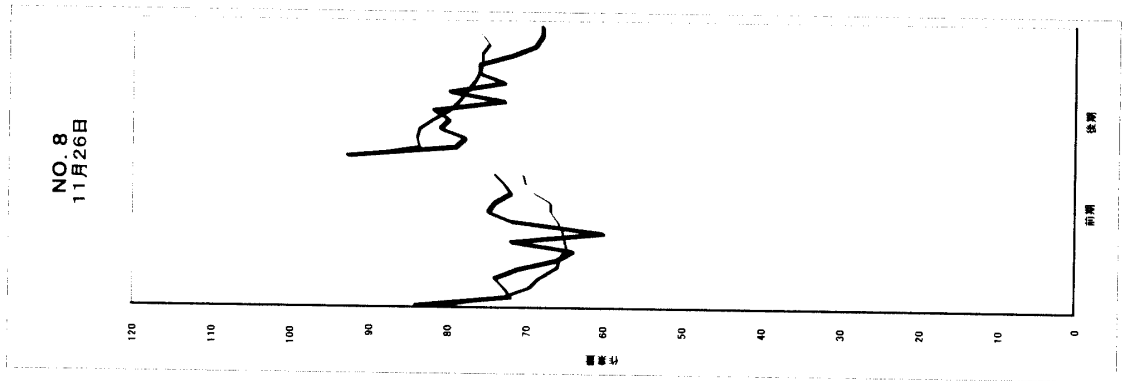
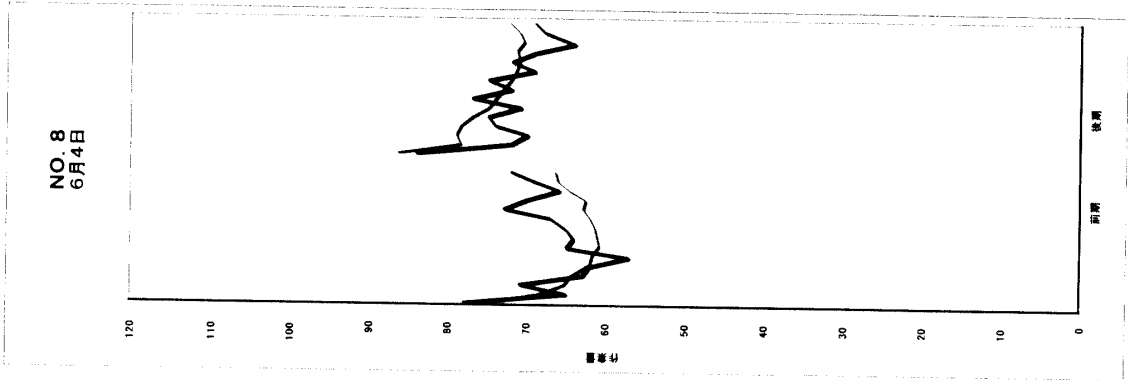
資料



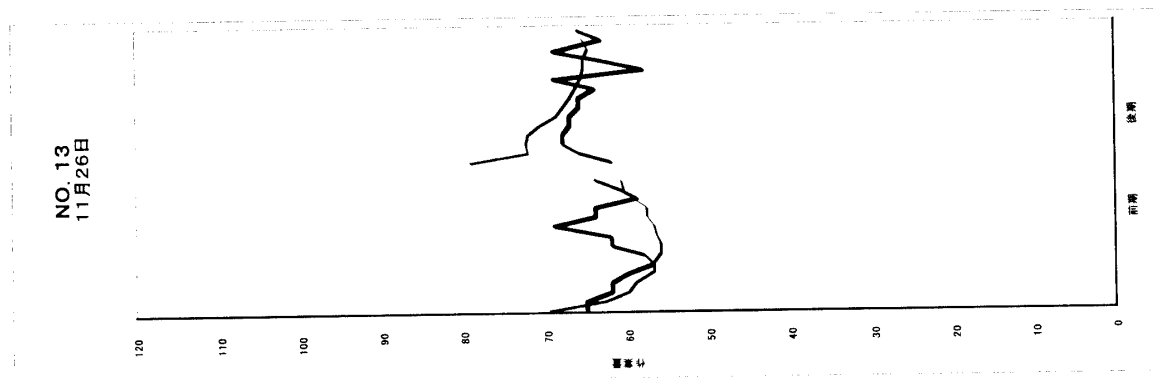
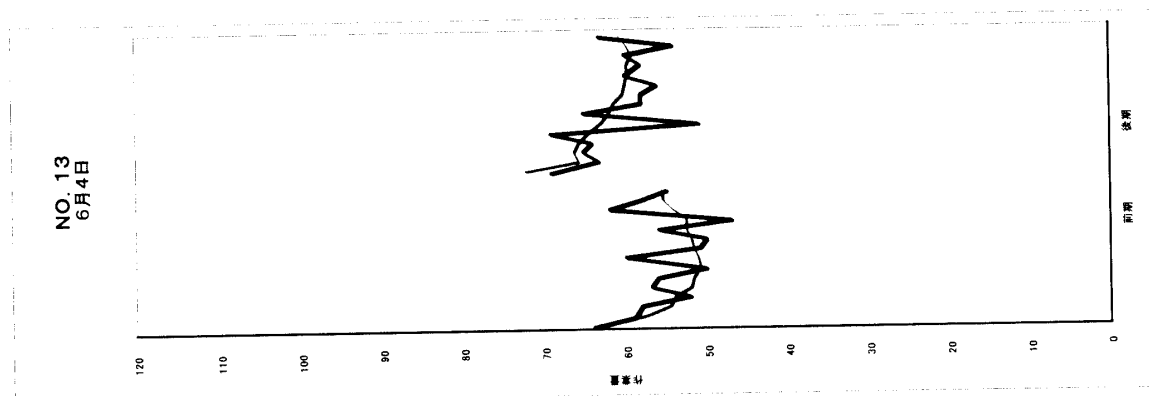
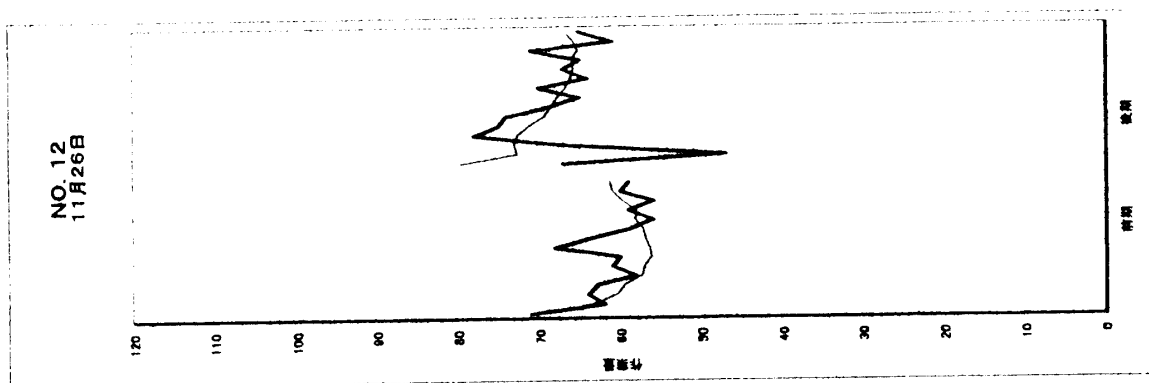
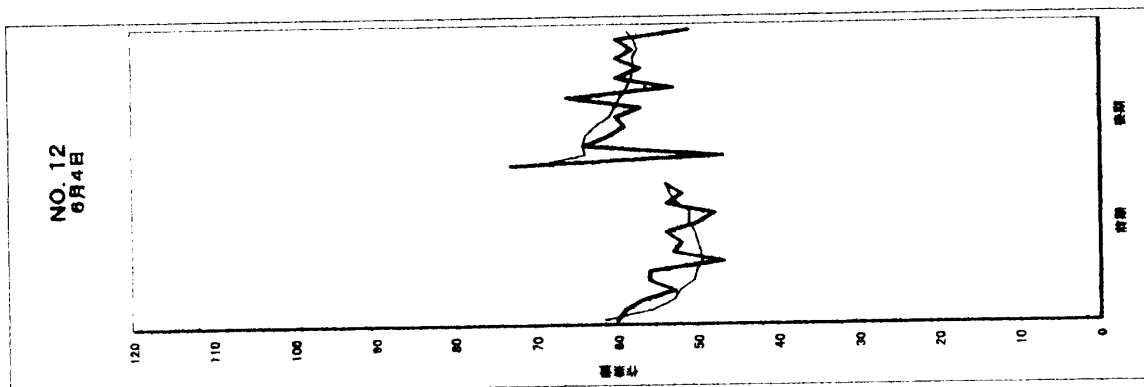


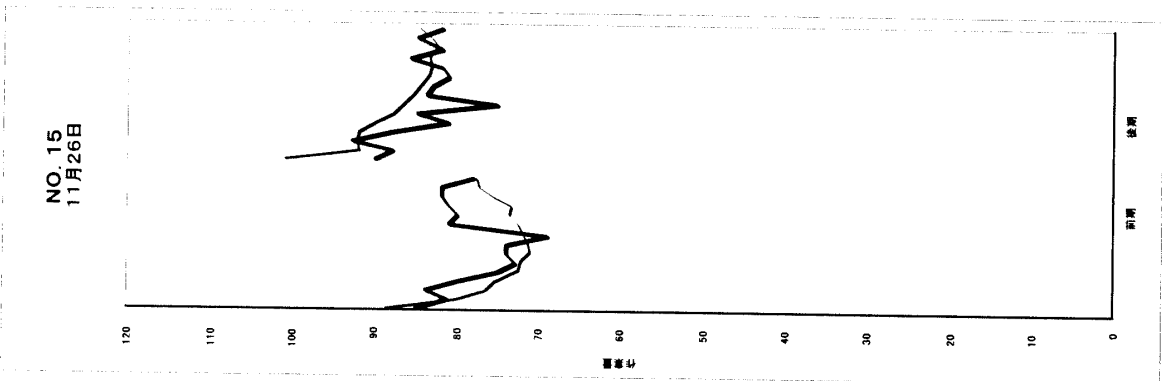
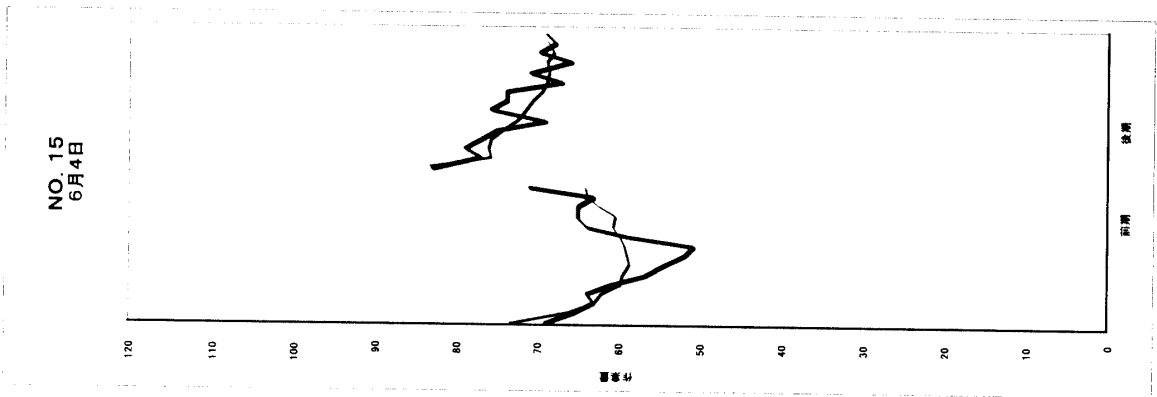
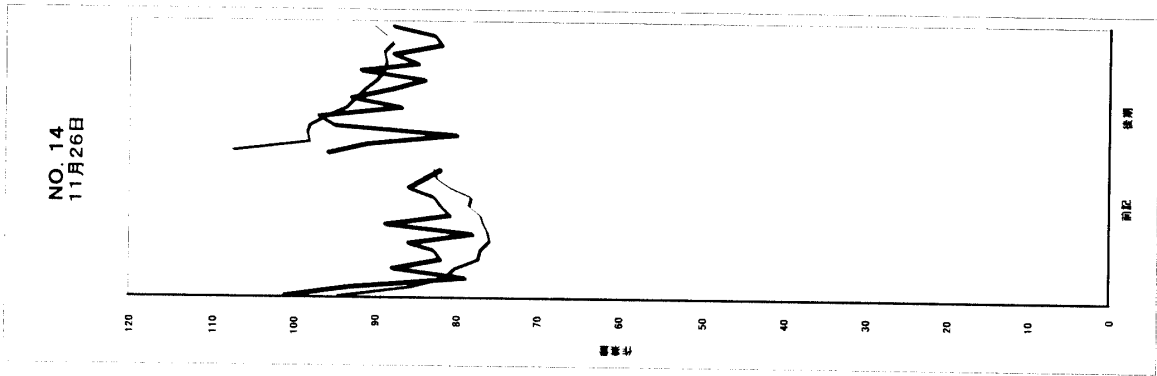
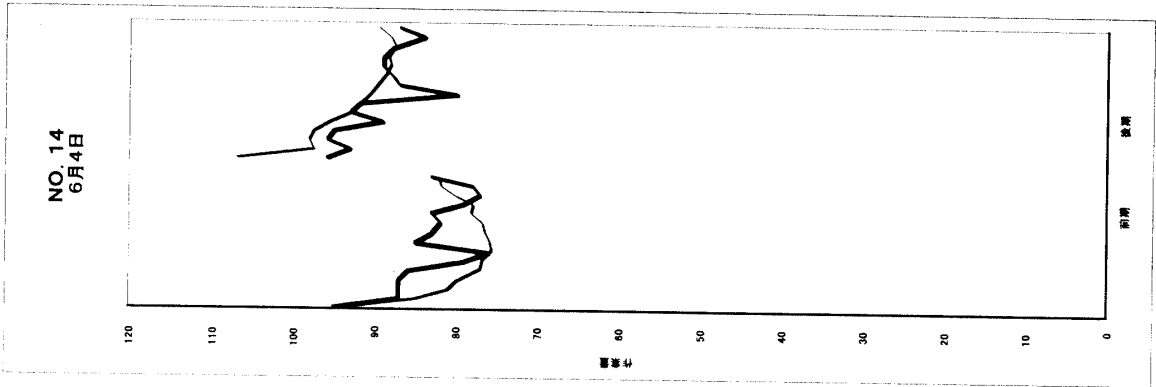
クレペリン検査における新PF値の妥当性に関する研究 (1)





クレペリン検査における新 PF 値の妥当性に関する研究 (1)





クレベリン検査における新 PF 値の妥当性に関する研究 (1)

